



號十三第
月四年五十和昭十
行發日五・回一月十
行發日五・回一月十
錢五金部一價定誌本
錢拾六金(共稅)年一
助之幸川大 編發行發
一ノ七西座銀區區東京市京東
社信通盟同 所行發

社史永へに輝く

南支戰陣の花形

市川太郎

「弾にだけは當るな!」との先輩諸兄の温い註文通り「南支戰線の影武者」としての使命をどうやら無事に果し三月中旬新政權誕生劇上演で猫の手も欲しいやうな東亞部のデスクに廣西省南寧から急遽舞ひ戻つた僕は未だなれば戦線渦中に在るやうな氣持だ、生きて歸れたといふ喜びよりも寧ろ半歳に互る影武者としての成果を誇る自己満足で身も心も躍るといふのが偽らぬ告白である、半年の短日月の間に僕は四つの作戦に協力する機会に恵まれた、即ち第一次中山縣、欽寧(所謂北海)、北上、賓寧(所謂南寧)の各作戦で就中欽寧及び賓寧兩作戦が新中央政權生誕と相結んで如何に有意義且つ紙上を賑はした大作戦であつたかといふこと及び斷然他社を壓倒終始異彩を放つた我が同盟電の精華については既に周知の通りである、然し此際潜む同盟現地諸戰士の生死を超越した奮闘振りについては遺憾乍ら未だ詳報されて居ない、之こそ正に新東亞建設の聖業完成への國家的一翼を擔ふ我が同盟事變史を永へに飾る貴重な一資料として茲に諸兄姉の認識を促す所以である。

戦史に類く武漢攻略戦以後に於いて南支ほど作戦の續いた地方はない、斯界の元老田村通信局長が滿一年半に亘り上海總局の通信部長として我社ペン部隊總元締の職責を果し赫々たる功績をモノとしたことは社を擧げて敬服に値するところであり、正に同盟の殊勳甲として動かすべからざる存在をなすに至つたが、若年よく「第二の田村」として南支戰線統括の任を果しつゝあるものに牛島廣東支局長の在ることを忘れてはならない、作戦又作戦と息吐く連も無い忙しい現地情勢のさなかにあつて一般通信發行の激務と闘ひ乍ら日夜我社從軍陣の指揮監督に寝食を忘れて精進する姿は何と云つても特筆モノだと云へやう。作戦毎に人間の完成への進歩の著しきを見てゐる同氏の自戒健闘を祈り乍ら彼を援けて第一線に立つ諸君を紹介し併せて其戦線苦闘史を繕くことしやう。

一方汕頭戦の經驗を有つ徳永康信記者と津隈敦士オベ(孰れも廣東)を海軍部隊に附けた、此大膽な編成には心あるものは恐らく驚いたことと想ふ、然し當時の僕の肚では此作戦こそ我々初陣部隊が次の作戦に備へてテストするには絶好なチャンスであり、萬一失敗したとしても支局長不在の故を以て僕が全責任を負ふ積りで終始井上社と一體になつて頑張り通したのである、此僕の英断は美事圖に當つて井上寺田兩君は初陣として肉體的には想像以上の苦勞を重ね貴い幾多の體驗を把握したが、打電亦極めて好調、初日から完全には他社を制壓連日に亘つて東亞部から最大限の讃辭を浴びるといふ嬉しい成果を齎らし「井上寺田名コンビ」の評が俄然南支報道陣を湧かすこととなつた、然し成



皇軍南寧戰線猛進

功の蔭には常に貴い縁の下の力持的存在が潜むことを忘れてはならぬ、本作戦に際しては偶々海南島から靜養に來廣中の中井海口支局長が基地のオベ陣を固め病軀を押し終始涙ぐましい奮闘を續け前線廣東北東京を結ぶロネオの偉力は全くノ一・タイムといふ驚異的好調を示したのである。

斯うした快調に恵まれた後味が未だ乾かぬ間に迎へたのが例の「北海欽寧作戦」だ「戦へば必ず勝つ」といふ確信の下に牛島御大を援け或は借越過ぎると思はる、許りの名々參謀長振りを發揮した僕は今更乍ら廣東支局長を護る精銳諸君が寸毫も不平を言はず實によく統制に服して呉れたことに感激してゐる次第だ。牛島支局長の徳望と同盟イデオロギーの反映だと思ふと今でも胸迫るものがある、陣容に於いては他社に遙かに劣る同盟陣に又も終始凱歌が擧らうとは何たる皮肉な奇現象ではなからうか、然し考へて見れば決して奇蹟でもなければ又皮肉でもなかつたのだ、全く「努力」と「人の和」の結晶に外ならなかつたことを敢へて強調して置く、或る當局と報道陣との不快且つ重大な手違ひと折柄の大暴風雨との爲に我が同盟陣は活かし得る有力な前線一班を持ち乍ら遂に最後まで之を用ひ得なかつたといふ泣くに泣かれぬ悲劇が皇軍壯烈な敵前上陸の前に起つたのだ、前記徳永津隈班こそ前回の中山縣作戦に軍事上の都合から「思ふ存分」の働きの出来ず「今度こそ」と満々たる闘志に溢れ乍ら又も此其だ思はれざる逆境に置かれ鬨り抜いた犠牲組であつた、従つて同盟陣にとつて後にも先にも唯一の命の綱は

中山作戦の名コンビ井上寺田組の一班あるのみ、他社には此他に既に遠く〇〇から從軍した最前線の別働隊がある、之こそ我等最大の脅威であり又最大の刺戟刺でもあつた、若し此別働隊に最初からちやん／＼活動されたら如何に「同盟強し」と雖も恐らくシヤツボを抜かざるを得なかつたであらうと今でも當時を回想する度に冷汗三斗の思ひだ「命の綱」と恃んだ井上寺田組と廣東との無電連絡がいつた、つたにはつたが未曾有と云はれたあの荒天の眞最中だ、船上から叩いて來る寺田オベの字號は船の烈しい動搖を其儘反映して音波の高低は兎も角として三字聞えたかと思ふと續く二、三字は忽ち消へてしまふといふ甚だ心細い状態だ、技術にかけては「斯界の雄」と謳はれる獨地義紀オベが徹宵必死の調整を試みつゝ今にも消え入りさうな寺田の波を猛烈な混信の中から掴む、どうして之が人間業と云へやう、たゞ、感謝敬服の外はない、一言一句と云ひ度いところだが一字を構成する符號の一短點一長點の一つ／＼が「作戦開始」荒天下敵前上陸」を報ずる貴重な文字なのだ、アトで聞いたのだが體の弱い寺田オベは寒氣と荒天の爲持病の痔に惱まざれ乍ら臥床した儘懷爐を抱いて此

消息

北支總局長 神子島梧郎
事務打合せの爲め三月十二日來社
長野支局長 中住 繁夫
同上三月十三日來社
札幌支局長 山崎 義人
同上三月十三日來社
東亞部社員 市川 太郎
南支作戦に従軍中の處三月十四日歸社
大阪支社經濟部長 秋山 操
北支へ出張中の處三月十五日歸社

三月三十日大阪支社へ赴任
經濟部次長 大森吉五郎
南支に於て負傷療養中の同少尉は三月十五日來社経過良好
國通編輯局長 升井 芳平
國通總務局長 富田 廣四
所用を帯びて來京三月十五日來社
大阪支社寫眞部長 鈴木 茂

三月二十二日午後九時東京發西下
岡山、神戸、大阪へ出張二十六日歸京
中南支總局經理主任 白坂 正男
事務打合せの爲め三月廿一日來社
常務理事 上田 碩三
三月二十六日午後一時三十五分名古屋へ出張廿八日歸京
航空部長 大川幸之助
庶務部長 鹿野伊之助
寫眞部長 牛嶋 五郎
中央政府選部式寫眞空輸の同盟機にて南京へ出張

第一報を叩き込んださうだ、此悲壯な苦闘の連鎖と結實こそ「同盟電大勝利」の重大な要素であつたことを認めて戴きたい、井上記者の筆勢も亦中山作戦の體裁がモノを云つてか、其眞價を發揮し實に要領がいゝ、それに他社の前線別働隊の行動を周到に警戒し第一日から此方面のカバーにまで文字通りの奮闘を續けた、其勢は忽ち報みられ「同盟電は常に他社を完全にリードし断然異彩を放つ」の絶讃電が本社から舞ひ込む始末だつた、言ひ遅れたが海軍部隊の活躍については社會部の中堅柴田記者が旗幟〇〇に、廣東支局特派の菊江記者は軍艦〇〇に夫々頭張り獨特の生彩を放ち萬遺漏なきを期することが出来た、更に特筆大書すべきは潮田(映畫)小林(寫眞)の兩君が荒天下身に迫る幾多の危険を冒して井上別に別れ欽縣から前進部隊に附いて道なき道を長驅「南寧一番乗り」をモノした事だ、

斯くて大小二つの作戦に終始ヒットを連發した我が南支陣の花形は舊曆更に「北上作戦」(廣東省粵漢線東北地區掃蕩)に出陣、徳永津隈班には中野(寫眞)長嶺(映畫)兩君が加つて翁源まで、井上葛原組には潮田(映畫)君が入つて英徳まで、更に新銳太田晋(政治部)記者には寺田オベと石井(寫眞)君が附いて清遠まで實に三班の前線部隊が年末から正月にかけて連日連夜に互り文字通りの不眠不休の猛強行軍を取行無電機を叩く暇さ(容易に得られぬといふ状態)だつた、食糧は窮乏のどん底に瀕し元且などは皆生手を囀り乍ら敵地から遠く故國の空を偲んだといふ逸話さへ残された作戦だつたが、軍の作戦目的が地域の占領に非ずして抗日軍の覆滅掃蕩にあつたため相當大規模な作戦だつたに

も拘らず紙上に於いては極めて地味な取扱ひを受ける結果となり、我が花形戰士折角の苦闘も大して惠まれず此點甚だ同情に堪えぬものがあつた、ペン部隊にとつて其生命とも云ふべき紙上の取扱ひが低調な事くらゐ腐る事はない、寢食を忘れ而も將兵と生死を共にした其苦勞の結晶が銃後を護る一般國民の前に大きくクローズ・アップされぬ位心細い事は又とないのだ、斯うして腐りに腐れ、疲れに疲れ抜いてやつと廣東支局の支關に立つた途端に「旅裝を解くな、明朝出發だ」と新作戦への從軍を嚴命された徳永、太田二班の心境は果してどうだつたらう、否、當人達より寧ろ「待つてました」と許りに彼等に重ねての從軍を迫る牛島支局長や僕の苦衷は如何ばかりだつたらう、捜せ衰へて髪は延び髪まで生へて眞黒になつて歸つて来た乞食のやうな戰士諸君がそろひもそろつて「よし頑張らませう」と異口同音に莞爾として引受けて呉れた時の劇的シーンは蓋し僕生涯の尊い思ひ出とならう、此嚴肅莊重な諸君の態度によつて「南寧作戦は戦はずして又同盟の勝だ」と忽ち僕は直感し百萬の味方を得たよりも更に一段と力強さが心底から溢れ出るのを禁じ得ず遂に一晚中男泣きに泣き明かしたのであつた、松方中南支總局長と牛島支局長の委嘱を受け自ら三十名近い大所帯を率ゐる南寧戦線へ向ふ出發前夜の僕の身としては蓋し當然の心境だつたと想ふ。

共ニ藥の上に横はり、或は魔の飲寧道突破に生死を誓つたり南寧への行程だけでも筆舌には到底盡し難い難行苦行の連鎖であつた、併し南寧滞留四十日の食料飢饉と豫期せざる意外な寒さには流石の猛者通も全く「敗つた」といふ以外には言葉がない、「武士は喰はねど高楊子」と言ふが、片栗粉だと思つて美味さうに喰つた後でそれが糊だつと判つて無念がつたり、報道部の臺所で失敗した芋の天ぷらに中毒して猛烈な吐瀉や下痢に見舞はれる等「喰はんが爲」の悲喜劇は限りもなく展開され、作戦開始の遷延は市川部隊長をして徒らに炊違ひの食料難打開策に腐心せしむるといふ珍現象をさへ招來したのであつた、血氣旺んな三十人近い同盟陣を餓死させないまでも作戦遂行までは何となく最少限度の營養素で持ちこたへさせねばならぬ、物資窮乏の脅威と苦惱とを之れ程強く痛感したことは僕にとつて之が最初であり、又恐らく最後であらう、どんなに作戦開始の到來を希ひ、開始の遷延を呪つた事か、全く夢のやうだ、待望の日は遂に來た、先陣は太田大川班(石井潮田を含む)だ、初陣の大川オベにくどい程訓戒を與へて門出を祝す、續いて之亦初陣の張切ボーイ藤本有典(社會部)記者に配する津隈班(中野を含む)、だ南寧基地には僕の下に徳永記者と寺田オベを殘し兎に角陣容は整つた、勿論報道戦には絶対に勝つ自信がある、否石に囀り附いても負けられぬ一戦だと僕は最初から決めてゐた、たゞ一つ心配の種は南寧附近一帶の地形が我が社の無電機にとつて決して樂觀を許し難い實情にあつたことだ、況んや初陣の大川オベを前線に出した僕の英斷的責任があるだけに憤みは一入深刻であつた、ところがどうした事

か、太田、大川班の無電連絡が第二日目からブツツリ断られた、皇軍一大包圍網完成の頂點をなす「寶島」突入の先陣はどうしても太田班の從軍してゐる部隊なのだ、此重大な一瞬を前にして何たる事だ僕も寺田オベも必死となつて大川オベの波を探つて見たが一向手應へがない、廣東も北京から急行した元老津田オベと葛原、小林(臺北)兩君が躍起となつて全力を盡して呉れたが駄目だ「萬事休す?」半死絶望に近い悲壯な氣持で斷念の肚を決めかけた僕に「冷静な落着き」が蘇つたのだ、虫が知らずか、武運が強かつたのか、客來中の徳永記者を〇〇に急行させた、岡星だ「皇軍寶島突破」我が一大包圍網完成「一大破滅戰態々展開」のビッグ・ニュースは瞬く間に本社に飛んだのである、恰度其頃太田大川班は賓陽に入城して寢食を忘れてポータブルに囀り付き必死の全力を傾倒してゐたのだが、不幸にして天運大川オベに惠まれず南寧基地のカバ一奏效して危く他社に抜かれず却つて之をリードするを得た「鳴武縣城突破」の特種亦完全に徳永記者の鮮やかなスクープであつた、藤本記者が初陣で兩足に出來た岩のやうな豆を引摺り乍ら上林まで強行突破を續け豊かな筆を以て異彩ある打電に努めたことは太田記者の隠れた力圖と相俟つて世界戦史未曾有の一大戰果を収めたと言はるゝ此南寧作戦遂行への協力の者でなくてはならぬ、なほ本作戦開始に方僕が女房役として折角持参してゐた柴田記者が南寧から、又映畫の長嶺君が欽縣から夫々病氣のため後退の巴むなきに至つたことは不可抗力とは云へ返すくも遺憾に堪えない、また南寧に於いて我々が物資窮乏と職務多端な中から毎日朝夕二回のレビ

力に依つてこと勿論だが、總べては全く、人の和を得た賜に外ならないことを茲に重ねて一言し以て同盟人事行政の將來に資せんとする次第である。

尙北上並に賓寧兩作戦に際しては高雄社會部長が或る特殊の使命を帯びて來廣、僕とは全く違つた角度から意義深い「蔭の一役」を立派に果たしたことを申し添へて置く。(二五、三三、二六)

### 南寧戦線より

## 戦場の奇遇

### 特派員 太田 晋



長曹島中と君田太

一月二日、十七日、作戦が始まつて私の部隊は五塘から他の部隊と共に公路上の山岳に攻撃を開始することになり、五塘(宿舍を取らうとして)とくしてゐる最中偶

然中島曹長殿は街の中程に居を構へそれまでずつとこゝに居つた譯で早速宿舎の世話や彈丸が來た時の注意までして貰つた上に豚肉の御馳走になつた、この時の豚肉のうまさ今なほ忘れ得ない思ひ出である。

翌日未明、私は連絡員一人連れて山へ登つた、牛島の左隣が即ち三木の攻める岩山でそこがいづまでも落ちない。朝からはじまつて引つきりなしに銃聲がしてゐるのに十何時間経つてもまだ同じ處で射つてゐる「あの山の後あたりの中島さんがゐるのだらう」と思はれるあたりがそのころだ、霧が深くて判らないがこの調子では本當にもう會へないかも知れぬと心が暗くなつた。幸ひ次第に敵も後退して各中隊は一齊に追撃に移つたこの追撃戦記はこの作戦で最大の辛苦の記録であらう。吾々は豫定通り迂回行動に移り二月二日賓陽に進入し、こゝに堂々たる宿舍を

# 議會通信の樂屋裏

## 政治部 一年 生

狭い控室も使ひようで廣いと云ふわけではないだらうが、道一つ隔てたあの白聖の議事堂とは凡そ似ても似つかぬ貧弱なバラック建の一室に陣取つた我社控室は、實際忙しい時は立錫の餘地もない程狭く、ズラリとオーバーが壁を覆ふて掛け置かれた細長い此の部屋の中は所せまいまで机と椅子で満たされ、今年は餘り狭いと云ふので隣の電話室を取り外して見たがどうにもならない、そこを少し細工して見た所で結局同じ事と諦めて、休むものは立ち、仕事する者だけが坐る事にして三ヶ月間を押し通した、此處の主は、朝から晩まで端然と控へて鮮やかな采配を振る久保田先輩であつた。

田中、長島兩次も一週間交代で此處に現はれ、福田部長は控室の疲れた頃を見計らつて適當に差入れに來る。

× × ×  
地球の上に朝が來る、その裏側は夜だらう——まだうすら寒い朝の風にオーバーの襟を立て、此の控室へ集結した一同は、書き込まれた執務制當表をちよつと覗き込んでそのまゝツサと院内の職場へ消えてゆ

き吹込むもの、一瞬にして静けさは破れ、議場の動きは刻一刻、細大漏らさず本社のデスクを通し、そこそそ世界の隅々、地球の裏側迄へも送られる、飴玉をシヤブリ／＼と聲を濁らして讀み上げる原稿は、一本の線を傳つて本社に待ち設けた人の耳に入り腕を通し鉛筆の先に送つて見る／＼中にスラ／＼と書き流されて行く。



寫眞——議會の同盟控室

平生は政治部のデスクに無用の長物となつて片隅に押しやられて居た巨大な直通電話はかりして議會中はなくてはならぬ生命線と化し、兩院を通じ、本會議、委員會を始め大小様々の原稿は一切合切此の電話器を通じて送られて行く一字一句でも間違へばそれはその儘世界にバラ撒かれる、恐い見たいな危険性を多分に孕んで居ると思へば待ち受ける新人はベルの音を聞いただけで早や喉が乾いて來るのをどうしよう様もない。中耳炎患者の様に頭にスッポリと受話器を巻きつけて、電話の切れ目にポツと深い溜息を吐きながら、早や春となつたりらかな窓外に目をやり、ベルの屋上に戯れる若い子の姿にうつとりと眺め入つてゐるものなら途端にケタ／＼とましくベルは鳴り響いて、控室の先輩は情け容赦もなく流れる様に早口で原稿を讀む、鉛筆持つ手は亂れて、聞きもせぬ思ひもせぬ事を夢中で書き、後で恐る／＼伺ひを立て、聞き返す氣持は、また何とも云へない味である、こんな事を何度も／＼繰返して冷汗をかいて居る中に漸く一人前になる。

× × ×  
時時になつて議場が次々／＼と休憩になると、皆一度にドツと控室へ歸つて思ひ／＼に原稿用紙に筆を走らせる、會議の経過、ゴシツ種、ひとわり書き終ると零時半から貴族院の學校が始まる、衆議院と違つて此處は毎年本會議以外は總べて秘密會を墨守し、新聞記者は一切近付けないかわりに、零時半と四時半には掛りの者から委員會の経過を発表させる。各社の記者がドヤ／＼と詰めかけて、机の前へキチンと坐り小學生然と待ち構へて居る所へ現はれる彼等發表掛は、凡そ新聞と云ふものを見た事のない人類が多いらしく、頭の方は忘れてしまひ、尻から／＼座談的に話しかけて、折角筆記したものはメモの様なものになり、又新しく書き直させられたり、さうかと思ふと讀み上げる聲は悉く鼻へ抜けてしまつて、何を云つてゐるのやら一々我が耳で判断し修正して書かねばならなかつたり、實際その生國を疑ひたくなるやうな者も少くないのは泣かされる、だからこれはあの電話修業と同様、新人にはなくてはならぬ重要課程の一つで、これがどうやらコナセ出すとやがて容易すい委員會に入れられて鍛えられるのが常道である。

× × ×  
委員會は主として關係者擔任の者が入る事になつて居るが割當の都合や座談會等の爲、さうばかりとは決つて居ない、殊に本會議の本記でも、時々場合によつてはいつ何ん時新米の頭に廻つて來よりも知れない、又不意にそんな命令を受けた時など、常日頃傍聴して居た時とは違ひ、本議場は物々しく眼の前に據がつて來て、竝んで坐つた各社の記者の眼は一齊

× × ×  
占領した。

× × ×  
中一日おいて四日、昨夜〇〇がこゝに入つて來たといふ。〇〇とは鈴木部隊が屬する兵團の名である。「ひよつとすると中島さんんこゝへ來られるかも知れぬ」そんな豫想を持つてゐる折柄、その日の午後「同盟はこゝですか」といつて眞黒な兵隊が這つて來た。

× × ×  
「あ！中島さん」馳けよつて手を握り「御健で」—あとは感激に舌が纏れて言葉が出ない「また來ますから」と言ひ残して中島さんは部隊を追つかけて行つた「晩に來て下さい」後から叫んだ「よく運へた、お互に生きてあつた、よかつた」と獨りで繰返した。

× × ×  
その晩は五塘の豚肉のお禮に空前の御馳走を並べて中島さんに鱈腹食べて貰つた。豚のテンブラ、鶏の足のむしやき、支那酒、鶏の

× × ×  
に新米の自分の指先きに注がれて居る様な氣がする、質疑も答辨も聞けば聞く程すべてが要點の様に思へば強引に頭から速記してかゝると隣／＼に何もかも判らなくなつてしまふ、控室から突返されて來た原稿を見ると、質問した事は何一つ答へておらず聞きもせぬ事ばかり答辨して居る。息ははずんで眼は据つて居ても立つて居られない焦ら／＼した氣持、こんな時にはきまつて後からやさしく肩を叩く人が居る、何時の間にかたの先輩の老練な手先きがツツと伸びて要點を加筆して呉れる。あゝやれ／＼、ホツと胸撫で下ろした序に右手の傍聴席に一瞥を呉れる、こんな所を見られたら百年の何やらも云ふ本能がチラと閃くわけでもなからうが、さても凄じい修業ではある。

× × ×  
スーパ、焼飯等で豪華な宴會、食べながら話を聞き、われ／＼も話し、五塘以來の久瀾を叙し、最後にその日報道部と同行して來た徳永君のお土産である上等の煙草を吸ひながら、鈴木部長隊長戦死の状況、理解ある部隊長の事、澤山の馬を失つた事を語られたが、しかし傷一つ負はぬ武運、戰場の邂逅など相互感無量の限りであつた。

× × ×  
翌日別れる時、蒲燒の罐詰ミルク海苔なげなしの煙草等を贈つて無事なる歸還を祈つた。六日吾々はトラックに便乗して南寧へ戻る途中よく／＼の御縁と見え、馬と一緒にトコ／＼歩いて居る中島さんの隊を追ひ越した。残りの煙草を分けて「南寧で一ぱい飲みませう」と約束して別れたがその後遭ふ機會がなかつたが、中島さんは相變らずの元氣で南寧支局へ訪ねて來られたそうだ。今も恐らく南寧附近で活躍して居る事だらう。

× × ×  
太陽が西に傾いて、議場もそろ／＼散會氣分になると、院内からは次々と一日の氣苦勞に疲れた人々がまた控室へ歸つて來る、今日の結果、明日の見透し、昨日の議會等々、黙々と原稿用紙に向つた先輩連中は、狭いデスクに目白押しに並んで何時迄も倦む事を知らない、出來上つた原稿は片つ端から五本の電話にかけて讀み上げる聲が喧しく交錯する中を、オートバイの使が溢れた原稿を寫撮みにして本社へ届けつける。別項記事、速記の纏譯、暫くは聲を洗ふ様に混雑する此の控室も八時を過ぎると漸く静かになつて來る、解放された数人が一隅に集つて朗らかに打ち興する楽しい一刻も餘り長くは續かず離れて三々五々本社へ歸る。



マニラ通信

ケソン號事件その他

在マニラ 中屋健次

油を賣る運轉手

「恩を仇でかへす」ことは比島人の天性であつて、今更日本人が驚く程のことではない。極言すれば、比島に住み比島人を雇つてゐることは、日本人の眼から見れば、泥棒を雇つてゐるようなものである。市場に買物に行つた女中は釣銭をこまかすし、運轉手は主人の自動車のガソリンをタンクから盗む。自動車の運轉手が「油を賣る」のは蓋しこれから謂ひ傳へられたものらしい。もつと滑稽なのは比島人に金銭を任せ買物する時には、丁度その価格を渡さぬと、残りは貰つたものと思ふことだ。試みに十ペソ紙幣を渡して二ペソの買物をさせて見れば、ちやんと十ペソ使つて来るから大したものだ。こいつらを如何に可愛がつても結局駄目だ。女中などは一ペソでも多く給料をやると言へば三年も四年も厄介になつた主家をサツと飛出してしまふ。この點大に劣る譯である。

比島が大枚七十萬ペソを投じて米國から買つた最初の太平洋航行汽船プレジデント・ケソン號があつたりとその第一回航海で沈没した。この船の船長オンルピアといふ男は比島一流の船長だが悲しいことには船を操縦する技術を知らず、コンパスを間違へて種ヶ島附近で坐礁してしまつた。その結果はさんざん日本船浮島丸に迷惑をかけながら、マニラに歸ると自分の技術の未熟、船長にあるまじき行爲の數々を棚に上げて「命の恩

人」浮島丸の悪口を言つてゐる。日本では相當憤慨もし、外務省情報部長の聲明と迄なつたが「恩を仇でかへす」ことが比島人の天性だといふことをよく知つてゐる記者の如きは全く冷静そのものすし怒りもなかつた。否怒つてもしようがないのである。こゝで記者は本文の讀者に「同盟通信報」一月號の拙文も一度熟讀して頂くことをお願いしたい。記者が「尻尾のない猿」とか「洋服を着た野蠻人」とか言つたのは比島人のことなのである。今度はその一つの例に過ぎない。要するに比島人といふものは一般にかうなのである。



寫眞——マニラ埠頭

に、吉田總領事が浮島丸船長を擁護するのは不公平である。浮島丸無線技師との問題、即ち打電を依頼したとき拒絶したこと、は英語を理解しないための誤解であらうとは事實を誤るも甚しい、彼は英語をよく理解し明かに拒絶し、翌日オンルピアに謝罪した、といふのである。其他の諸點、浮島丸のボート下降の拒絶とか第二ボートで避難したとか、サインを要求されたとかの主要な點については何

の下手なことを素晴らしいもので、これでは日本で「キングス・イングリッシュ」を學んだ浮島丸船長以下高級船員が了解し得たかどうか頗る疑はしいのである。比島人はオンルピアならずとも英語の上手なものに極めて多く、記者などは着任當時屢々彼等の英語に惱された経験を持つてゐる。ケソンの演説を聞きに行つた際、どうしても「オテル」オテル」といふ言葉が判らず閉口したが、これは「Hotel」といふ英語の發音なのだから笑はせる。先づ「比島英語」が聴きわけられる迄には數ヶ月を要するのが普通であらう。

比島人の性質をよく理解せずして、所謂日比親善工作を行ふことの無效果と逆効果について日本はもうそろそろ判つてもよい頃だと思ふ。神戸でケソン號船員達を歓迎した日本人達が口惜しがつてゐる氣持がこちらではよく判る。

舞踊會

もう一つ序だから比島人の性質をよく現してゐると思ふ事例を御紹介しよう。比島人が食ものこととは無頓着で衣服のことや表面ばかりを飾ることは既に御承知と思ふ、が去る二月十六日夜ケソン大統領招待の舞踊會がマラカニアン宮殿に隣接する庭園で催された時のことである。數百人の人達——尤も大部分は比島人だが——を招待し乍ら煙草一つ接待せざうイスキー一杯飲めないのである。その貧乏さ加減これが大統領ともあらうものが人を招く禮かと奮慨したが、これは米國人——主な米國人は馬鹿にして來なかつたが——日本人の考へ方、比島人は飲ものや何かは全くどうでもよいので、ダンスが出来、ジャズを楽しんで満足してゐる。記者は花月園式の色電球の下で呆れてゐたが、夜も十

一時半となり空腹を覺えたので已むなく顔見知りの比島人新聞記者と卓につき、何か食ふようではないかと提議した。彼は承知して席を立つたが數分にして卓上はサンドウィッチの山をなした。記者はあまりの不思議さに「一體どうしたのだ」と尋ねると彼曰く「こゝろいふ時にはボーイに金をやらなければ何も食へないんだよ」と親切に教へて呉れた。記者は算閉し招待を受けた先でボーイに心付をやらねば接待しないボーイは全く知らなかつたが、比島では大統領の官邸に於ける招待でもかかる心構へが必要なのである。この比島人記者は最近ニューヨークから歸つて來たばかり、同盟の安保君とは親しくしてゐた人である。

今も亦、比島人が一人訪ねて來た。曰く、四五月の休暇を利用して日本訪問の觀光團をつくり自分が引率して行きたいから便宜を計つて呉れといふのだ。そいふ御用ならジャパン・ツーリストビュローにでも行つたらどうだと言ふと、ツーリストビュローでは金を呉れないと抜かし居つた。誰が金など知りもしない奴にやるものか。この男曰く。比島は貧乏で日本は金持だ、だから比島人が日本に行くには日本人が金を出すのがあたりまえだ。記者は開いた口がふさがらず、文字通り呆れかへお目にかゝつてゐるが、こんな手合は始めてだ。比島人に日本を見せやることはいふには違ひないが、連中に金をやつて日本のゲイシャと遊ばせてやらうといふ在留邦人の多いのには全く敬意を表す。

ともあれ、記者が希望すること日本が比島人を買被らないで欲しいことだ。うつかり敷衍すれば

ひどい目にあふ。今度のケソン號事件がいふ例であるこんな手合とサイン問題を起したり、一介の政治ゴロだつたらモスを可愛がつたりした記憶が實に苦々しくよみがへつて來て不愉快だ。日比親善論者に警告したい。日米親善工作を伴はない日比親善は日本のためにも比島のためにも百害あつて一利のないことを。(二、一八)

渡邊皖君の戦線だより

事變勃發と共に昭和十二年九月應召以來足掛四年の戦線生活に北支派遣軍〇部隊本部付として活躍を續けてゐる渡邊皖君(岡谷支局勤務)より永田足利支局長の許に左の如き近況が寄せられた。正月早々移動命令に接し、今回山西の首都太原に參りました。首都太原は今や人口十六萬を有する近代的大都會に飛躍し昔日の佛を一新致して居ります。大慶高樓軒を連ね道路は立派に舗装され自動車も續るが如く交錯する。映畫館、劇場公園等の文化的設備も完備し市街はずつかり日本的にデコレーションされ、エキゾチックな雰圍氣は兎も角一寸見た處内地の町でも歩いてゐる様な錯覺を覺えさせられます。(中略)今回遺骨護送の任務を帯び北京に出張しましたが、その節同盟北支總局を訪ねし川島經濟局長に御會ひし色々社の事情や内地の模様等を聞いて實に懐しく思ひました。川島さんも俺の戦線生活の長い今では驚いて居られたが、それも今では山西の山嶺と綽名さへ頂戴して居ります。社業の益々發展を祈る。(下略)

この自己に不利な點をメンションせずして有利と思はれる點を強調するのは、比島人のこれまた天性であるから、この反駁はご無恥に驚くよりも呆れるのである。「没法子」といふ言葉は比島にはないが正に没法子である。その内容はあまり馬鹿々々しくて電報料金が勿體ないので打電しなかつたから要略して見ると、要する

この機会にオンルピアの英語について一寸述べて置かう、オンルピアは記者と會談したがその英語

等述べられてゐない。

この自己に不利な點をメンションせずして有利と思はれる點を強調するのは、比島人のこれまた天性であるから、この反駁はご無恥に驚くよりも呆れるのである。「没法子」といふ言葉は比島にはないが正に没法子である。その内容はあまり馬鹿々々しくて電報料金が勿體ないので打電しなかつたから要略して見ると、要する

この機会にオンルピアの英語について一寸述べて置かう、オンルピアは記者と會談したがその英語

等述べられてゐない。

舞踊會

もう一つ序だから比島人の性質をよく現してゐると思ふ事例を御紹介しよう。比島人が食ものこととは無頓着で衣服のことや表面ばかりを飾ることは既に御承知と思ふ、が去る二月十六日夜ケソン大統領招待の舞踊會がマラカニアン宮殿に隣接する庭園で催された時のことである。數百人の人達——尤も大部分は比島人だが——を招待し乍ら煙草一つ接待せざうイスキー一杯飲めないのである。その貧乏さ加減これが大統領ともあらうものが人を招く禮かと奮慨したが、これは米國人——主な米國人は馬鹿にして來なかつたが——日本人の考へ方、比島人は飲ものや何かは全くどうでもよいので、ダンスが出来、ジャズを楽しんで満足してゐる。記者は花月園式の色電球の下で呆れてゐたが、夜も十

# 同盟特信の再出發と文化啓蒙の問題

## 紙面狭少の悩み

▼：一頃は十八頁二十頁と頁數を競つた一流紙も、紙節約の御時世とあつて、十八頁が十六頁となり、更に十四頁、十二頁と紙幅を制限し、雖ては十頁時代八頁時代も遠くはあるまい。而し記事も廣告も極度に制限が加へられこの結果廣告は直接収益に影響を來す。一時は廣告の多い程新聞の格式も權威も高いとされてゐたのだが、當節ではそんな事も言つてゐられない。収益を無視しても一定の記事量を確保したいといふのが偽りのない要求である。

▼：それ程までに窮屈を感じてゐる紙面である。冗文散文は斷じて抹殺さるべきである。現にラヂオ欄の如きは、一頁乃至八段も割愛してゐたのを、今日では二段か三段、その日のプロバカリに壓縮されてしまつた。この傾向の中に在つて閑文字さへ見られてゐた特別通信——所謂學藝もの、家庭記事、婦人、子供、娛樂——をこの際擴充擴大するといふのは些か時代錯誤の感がないでもない、事實一部からは御叱りも受けたし白眼視もされた。

▼：だが特信部は動かぬ希望と決意に溢れてゐる。それといふのは特信部は新たな時代に最も必要であるところの文化啓蒙に新境地を開拓したい、日本の文化啓蒙の第一線に力強い發言者とならなければならぬといふ國家的責任感があるからだ。

## 文化啓蒙の大旗

▼：正しいニュースは正しい輿論をつくる。正しいニュースも絶對條件として、茲に所謂新時代に於ける文化啓蒙の絶大なる仕事に課せられてゐる所以なのである。そして此問題はニュースが多方面に互るのに倍加して特信の記事は多角的であるために多くのスタッフを必要とするのは又當然である。

▼：筆者は内閣情報部のK書記官と對談中談偶々此問題に觸れた。K氏は「いやその話なら我々も計畫した事がある、同盟の特信部に特別の協力を願つて文化啓蒙に實着な方便を發見したいと思つた。せめて解説記事や讀物の中に、思ふ存分政府の意志を盛り込んで是非とも讀者に讀ませるといふ方法を講じたかつたのである。然し此の計畫は机上論だけに終つて居る」云々と。

▼：これは確かに一つの着眼点である。少くとも従來のやうなボスターやパンフレット或は標語集などに比べると進歩である。然しながら筆者は個人的見解として「特信部は新たな目的に向ひ新たな意氣込を以て再出發する。眞に國策線に沿つた文化啓蒙に働く積りである。だが決して政府の直接代辯となり、或は政府の原稿を代理配給する意志ではない。同盟は新聞社の共同機關である限り新聞社の要求する所を充たし、且つ新聞社と協力して文化方面に挺身したい」と肩を聳かしたのであつた。

▼：特信部は一つの家庭記事を書くにも、文化啓蒙の線に常に一致しなければならぬ、そしてこれらの配給原稿は、新聞社としてその紙面に盛つて必ず讀者に喜ばれ、且つ讀者の知識や常識の糧にならなければならぬ。而して問題に依つては半強制的に新聞に掲載を要求する程の確信を持たねばならぬと、かくして其の特信部は張り切つてゐるのである。

▼：特信部の現在のスタッフは量に於て質に於て未だ満足する所まで到つてゐない、然し乍ら特信委員會が之を補つてゐる編輯局各部の部長若くは次長を以て組織し、此の委員會を通じて各部と縦横の聯絡を計るは無論、記事作製の實務まで各部に擔當して貰つてゐる。

▼：これ程の熱意を以て進んでゐる特信部ではあるが、再出發に當つて多少の悩みもある。先づ第一に前にも觸れたがスタッフの足りない事である。各部協力でどうにかやつてはゐるが、仕事が増え新たな分野に進むに従つて、どうしても人を増さなければやつて行けさうでない。近い將來社説通信を初めたら、新聞社が現に有つてゐるやうな論說委員會のものと同大なスタッフまで必要となるのである。かういふ事情と經費の問題とを合せ考へて見ると寧ろ不安なきを得ない。然しこれは必ず切り抜けなければならぬ。

▼：第二の悩みは、擴充された特信は出来るだけ各新聞社の特色を發揮せしめたいといふ趣旨から、能ふ限り多岐多種とし、各社の自由選擇に委しめたいと願つた。然しながら實際問題としては、同一種目について同一地の二社若くは三社が希望して來た場合は、折角の特色も特色でなくなる。そして同盟は原則上そのサーヴァイスを

▼：地方各社は出来るだけローカルなものが欲しい。そして同盟もそれに應じたいのであるが、特定のローカルは全國的な普遍性に乏しい。この悩みはかなり深刻なものがある。雪國と暖國では、たとへば同じく米の事を書くにも、品種が違ひ播種施肥の方法や時期も異なるので劃一的な記事は書き難い。依つてかういふ問題は出来るだけ各社から個々に注文や要求を出して貰ひたいと思ふ。その注文要求に答へて地方色發揮に協力したいと思ふ。

▼：次には量の問題である。特信の一般A號は各々一日平均十段分を、G號でさへも七段分を豫定してゐる。然るに新聞社は減員で記事の收容力が漸次低下してゐる。このために各社から量を減らしたいといふ聲が擧げられてゐる。特信部の立場になつて見るとそれも亦悩みの一つで、結局一定の量は崩さず、然も質をよくして行くからいふ改善が必要であると思ふが、現在のスタッフと豫算では尙多少意の如くならざる悩みがある。

▼：筆者は東北の各社を訪問して色々説明した。然るに或る一流社は用紙難になつて極度に減員した結果朝夕八頁で、ニュース以外の學藝家庭その他は掲載の餘力がない。にも拘はらず、文化啓蒙の重大性を認識されて契約に應じてくれた、そしてその社長は或は特信の大部分は實際上使用しないかも知れないが、と前提して我國の文化啓蒙運動は從來甚だ無力であつたし、また羊頭狗肉はおろか第一その足が大地についてゐなかつた。然し同盟特信は多數の新聞といふ大地を有つてゐる。

## 困難と悩み

▼：筆者は東北の各社を訪問して色々説明した。然るに或る一流社は用紙難になつて極度に減員した結果朝夕八頁で、ニュース以外の學藝家庭その他は掲載の餘力がない。にも拘はらず、文化啓蒙の重大性を認識されて契約に應じてくれた、そしてその社長は或は特信の大部分は實際上使用しないかも知れないが、と前提して我國の文化啓蒙運動は從來甚だ無力であつたし、また羊頭狗肉はおろか第一その足が大地についてゐなかつた。然し同盟特信は多數の新聞といふ大地を有つてゐる。



同盟人事

(二、二一三、九)

- 命 總務局企畫部長 波多 尚
- 命 總務局出版部長兼務 勢多左武郎
- 命 編輯局特信部勤務主任 (部長長待遇) 小寺 信重
- 命 編輯局特信部勤務主任 池田 雄藏
- 命 編輯局出版部編輯主任 伊藤 菊夫
- 命 編輯局出版部編輯主任 田口 修治
- 命 編輯局出版部編輯主任 柴田 機一
- 命 編輯局出版部編輯主任 宗澤萬壽夫
- 命 編輯局出版部編輯主任 廣田 善隆
- 命 編輯局出版部編輯主任 李 奉 吉
- 命 編輯局出版部編輯主任 廣田 榮子
- 命 編輯局出版部編輯主任 飯島八千代
- 命 編輯局出版部編輯主任 井島 民子
- 命 編輯局出版部編輯主任 今川 正美
- 命 編輯局出版部編輯主任 橋本 恭男
- 命 編輯局出版部編輯主任 木田 正夫
- 命 編輯局出版部編輯主任 伊賀 房磨
- 命 編輯局出版部編輯主任 磯崎 安雄
- 命 編輯局出版部編輯主任 佐藤 壽人
- 命 編輯局出版部編輯主任 遠藤 辰也
- 命 編輯局出版部編輯主任 石渡 武雄
- 命 編輯局出版部編輯主任 藏田 耕三

- (南支出張中社會部勤務社員) 柴田 勝春
- 命本社歸還 市川 太郎
- 命本社歸還 西岡 正一
- 命北支總局勤務 鹽谷 作美
- 命天津支局勤務 笹山 正治
- 命中南支總局勤務 伊藤 菊夫
- 命中南支總局勤務 田口 修治
- 命中南支總局勤務 柴田 機一
- 命中南支總局勤務 宗澤萬壽夫
- 命神戶支局勤務 廣田 善隆
- 命社員試用、名古屋支社勤務 李 奉 吉
- 命社員試用、京城支局勤務 廣田 榮子
- 命社員試用、通信局地方部勤務 飯島八千代
- 命社員試用、福岡支社勤務 井島 民子
- 命社員試用、神戶支局勤務 今川 正美
- 命社員試用、岡山支局勤務 橋本 恭男
- 命社員試用、京城支局勤務 木田 正夫
- 命社員試用、編輯局寫眞部勤務社員試用 伊賀 房磨
- 命社員試用、通信局地方部勤務社員試用 磯崎 安雄
- 命社員試用、編輯局出版部勤務社員試用 佐藤 壽人
- 命社員試用、編輯局出版部勤務社員試用 遠藤 辰也
- 命社員試用、編輯局出版部勤務社員試用 石渡 武雄
- 命社員試用、編輯局出版部勤務社員試用 藏田 耕三

- 同 通信局英文部勤務社員試用 曾田 正二
- 同 通信局英文部勤務社員試用 濱田 秀雄
- 同 通信局英文部勤務社員試用 河野 京子
- 同 通信局英文部勤務社員試用 上村邦之丞
- 同 通信局技術部勤務社員試用 伊藤 菊夫
- 同 通信局技術部勤務社員試用 井深 和夫
- 同 通信局技術部勤務社員試用 井深 和夫
- 同 通信局技術部勤務社員試用 工藤 早雄
- 同 通信局技術部勤務社員試用 正木 和夫
- 同 通信局技術部勤務社員試用 宮内 敬次
- 同 通信局技術部勤務社員試用 洪 鐘 笙
- 同 通信局技術部勤務社員試用 相原キミ子
- 同 通信局技術部勤務社員試用 高橋 義樹
- 同 通信局技術部勤務社員試用 下川 深
- 同 通信局技術部勤務社員試用 川村 好子
- 同 通信局技術部勤務社員試用 柳井 露子
- 同 通信局技術部勤務社員試用 梅原 醇一
- 同 通信局技術部勤務社員試用 松岡 政行
- 同 通信局技術部勤務社員試用 依り休 職ヲ命ス
- 同 通信局技術部勤務社員試用 金 裁 熹
- 同 通信局技術部勤務社員試用 三寶 公
- 同 通信局技術部勤務社員試用 小野喜一郎
- 同 通信局技術部勤務社員試用 北村 進
- 同 通信局技術部勤務社員試用 遠藤 雅子
- 同 通信局技術部勤務社員試用 北川富久子
- 同 通信局技術部勤務社員試用 山本宗兵衛
- 同 通信局技術部勤務社員試用 武田長之助
- 同 通信局技術部勤務社員試用 柴田 機一

**荒尾勝頼君逝く**  
 金澤支局員荒尾勝頼君は去る二月八日以来流行性腦炎を患ひ爾來外枝夫人の手厚い看護をうけて居たが遂に三月十六日午前五時十五分逝去した、享年四十三  
 君は金澤市出身、永らく富山日報社にあつて敏腕を揮ひ昭和十年富山支局の設置せらるゝやその主任となり、翌十一年電通の同盟合併と同時に金澤支局へ轉任、暫らくにして更に大阪支局へ轉任、昭和十三年四月大阪——金澤間に専用線敷設せらるゝや再び金澤支局詰となり爾來今日に及んだ、資性剛毅にして果斷、その明朗闊達は同人尊敬の的であつた。

- 出世**
- 小笠 原進(本社寫眞部)第一子
  - 菅原 佐敏(福井支局)第二子
  - 小川 三郎(本社寫眞部)第一子
  - 望月 七郎(同)第一子
  - 我妻 敏夫(同)第一子
  - 島田 忠雄(大阪支社)長女
  - 根來 重雄(同)上長女
  - 丹 藤雄(名古屋支社)第二子
  - 豊田 治助(シドニー)第一子
  - 武者幸四郎(本社調査部)第一子
  - 青山 正夫(廣島支局)第三子
  - 權 泰善(京橋支局)長男
  - 大屋久壽雄(パリ)第三子
- 入營應召**
- 飯塚 照二(本社外信部)應召
  - 稻道 則(大阪支社)入營

**互助會報告 (三月)**

結婚  
 上原 正吉(本社經濟部) 前原 忠重(廣島支局)  
 濱本 光三(釜山支局) 大富 信二(大阪支社)  
 高田 信一(同) 野津 榮(同)  
 龜井種治郎(同) 上)

**見舞**

- 千葉 秀雄(本社調査部)病氣
- 大瀧 鹿次(同)技術部)同
- 猿橋 進(福岡支社)同
- 杉田 才一(本社庶務部)夫人入院
- 岩崎 敏人(同)經濟部)病氣
- 岡崎幸次郎(廣島支局)同
- 菅原 佐敏(福井支局)夫人入院
- 岡本 正一(大阪支社)病氣
- 櫻井 繁喜(名古屋支社)同
- 渡邊 定吉(釜山支局)夫人病氣
- 小林 寛(本社政治部)子供入院
- 荒尾 勝頼(金澤支局)病氣
- 稻津己喜一(南京支局)長男入院
- 内海朝次郎(本社調査部)夫人入院
- 細木 義親(岡谷支局)病氣
- 木田 秀光(名古屋支社)實家全燒
- 成富 好馬(福岡支社)病氣
- 田中 隆司(京城支局)同上

**弔慰**

- 村上 醇一(本社出版部)祖母死亡
- 小池 章(京城支局)死亡
- 花田爲次郎(札幌支局)實父死亡
- 金井 義元(大阪支局)實母死亡
- 小原機太郎(同)上)實母死亡
- 諸岡 一男(同)上)母死亡
- 奧村錦之輔(本社經濟部)祖父死亡
- 寶槻 一仁(廣島支局)死亡
- 小倉 彰(京城支局)長女死亡
- 沖 篤(福井支局)實父死亡
- 内田幸之助(富山支局)同上

**退社**

- 正井つね子(本社外信部)
- 小野喜一郎(廣島支局)
- 坂井 慶子(神戶支局)
- 進藤 幸祿(本社社會部)
- 北村 進(同)
- 山合 榛名(同)
- 大野千賀子(同)
- 工藤 孝一(大阪支社)
- 疋田 一男(岡山支局)
- 勝田 林藏(本社經濟部)
- 杉山ヤエ子(關門支社)
- 山本宗兵衛(本社出版部)
- 武田長之助(本社調査部)
- 松田 智(本社庶務部)
- 樋口 亮一(廣島支局)
- 村瀨 至次(富山支局)
- 神崎加壽枝(大阪支社)
- 八木 さだ(同)
- 小川 さを(同)
- 柴田 機一(同)
- 吉川 勝治(神戶支局)
- 北野 司(高知支局)
- 村山 潔(福岡支社)

**同盟クラブ販賣定價**

- 一、發行日及回数
- 二、定價及送料
- 三、各總支社局に對する御賣値段
- 四、社員購讀用販賣値段

時は正に春風 蕩各位ます 御健闘の程慶賀に堪えず、同盟社報に對し種々御寄稿を頂きましたが編輯の都合で、次號週しの已むなきに至つたものある事をお詫びします。(係)